■特集■「心の花」新・百人一首を読む（一）

大月閑

11　落ちきたる滝のとどろく勢ひは杉生に
　　ふるひ暗く地を揺る　　安藤寛

滝の勢いはもちろん、地を揺るがす滝の落下地点の陰影の濃い雰囲気を的確な表現で表した歌だ。心の花ホームページに紹介されている「盛りあがり巻く渦の輪の激ち合ふ波先あらく最上はくだる」という歌を見ても、勢いのある情景を描写することに優れていることがわかる。

12　春がすみいよよ濃くなる真昼間のなにも見えねば大和と思へ　前川佐美雄

前川佐美雄の代表歌である。大和に生まれ、大和に生きた者としての歌である。「はるさめ」は京都にしか降らないと、中西進が金田一春彦に聞いた話として記していた（『ひらがなで読めばわかる日本語』）が、（実際はどうか、服部崇さんに聞いてみたいところだ。）同様のことがやはり盆地である奈良の春がすみにもあるのだろうか。『大和』のこの歌が佐美雄の代表歌といわれるが、服部崇が指摘するように、『植物祭』からの変化があり、どこに佐美雄の歌の中心を見るかというのもポイントになるだろう。

13　南京路の夜のカフエに子猫ゐてすゐつちよと遊ぶ秋となりぬる　富岡冬野

子猫がすいっちょと遊ぶという光景に秋を発見する。南京路、当時の上海で生活していた時の短歌である。夜のカフェの雰囲気が伝わってきて、異国で、季節感を忘れない様子が伝わってくる。なお、富岡冬野については『佐佐木信綱研究11號』清水あかね論文に詳しい。特に上海での短歌を細密に読むことができる。

14　桃むく手美しければこの人も或はわれを裏切りゆかん　　真鍋美恵子

桃をむく手がクローズアップされていて、そこから自分を裏切る人なのではないかという発想は、適度な飛躍で見事な着地である。清水あかねのコメントによると「私性を排した歌人」だという。「この人」の抽象性が、読みを広げる。男だろうか、女だろうか。「この人も」の「も」に「までも」という雰囲気が感じられるので、「この人」に対して、きっと信頼を置いているのだろう。そんな人までもが自分を裏切る予感がドラマチックに表現されている。

15　放念のかなたに浮かぶ雲ひとつ　甲斐に生まれて甲斐に死ぬべき　保坂耕人

桐谷文子『マザーグースの翼にのって』に「甲斐駒ケ岳を真つ正面に見て走る車内の話題は耕人先生」など、何度か登場する保坂耕人。甲府で慕われていたことがうかがえる。まさしく甲斐に生きた歌人といえる。大和に生きた前川佐美雄、甲斐に生きた保坂耕人。12と15の歌を読めば、「故郷」を強く意識させられる。奥泉光は作家の故郷は実際にそこに生まれても、意識的に選び取り、創造の活力を与える「虚構」と言った（『虚構まみれ』）が、歌人にとってはどうだろうか。創造の活力であることは間違いないだろうが、生まれ育った故郷こそが、創造の活力だったように思う。

16　濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か夜明けか知らぬ　　斎藤史

斎藤史の名歌は多い。二・二六事件只中